

狂小人

虎形多

彼が果晴と蓋原將軍に面會したのには或年の曇つた溪つ

ほり冬の日にあつた。將軍は六疊の間の中央に胡座をすい

て精々し杖袋を貼こゝた。佐腹のぬい襪には荒い袴縹の綿

入を著せるた。出れば施療患者の仕着である。着獲夫長の

案内で中へ入ると將軍は待前に佐葉の手を休めて彼の方

を見たり。それは稀に見る温顔であつた。面長で鼻が隆

く銀色の文へ左疎齧が敷あつた。舌と歯とあつた。虎臥齧と

形容した。ソウな唇の下の一雙の眼は流石に炯々とし

この左か、思つたほど峻しく無さる。

彼は蓋原を思つた。何かある。將軍の病へあつたやうな氣

持かした。夫長も愈々態態に接接したのを彼も洋服の膝を几帳面

に四角に折つた。失禮な事にして將軍の一場用建をはなう

なりと思つた。あらあつた。將軍は鷹揚に頷いた。

「お前は何處から来たか。」

「京都から来ました。」

「あ、さうか、若倉病院を知るのか、島村のちよるのか。」

「知りません。」

「あ、醫師者では無いな、お前は？」

「醫師者ではありません。」

「あ、何だか、何を思つたのか？」

「あ、何だか、何を思つたのか？」

「あ、何だか、何を思つたのか？」

「あ、何だか、何を思つたのか？」